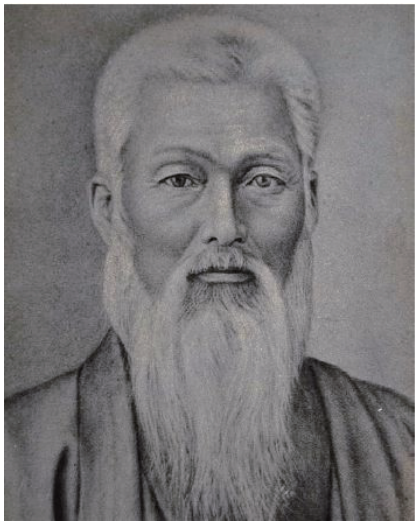
◆妙法観世音菩薩の由来



経王寺は明治8年（1875）、松井寛義上人と大岡助右衛門という大工さんが建てました。
助右衛門さんは幕末に横浜の大岡村で生まれ、東京で大工修業の後、函館で五稜郭の建設に参加します。札幌の開発が進む中、今度は札幌で、現在中島公園にある「豊平館」や学校・警察署を建て、豊平橋の架橋にも携わる有名な大工さんでした。

助右衛門さんは、ギャンブルとお酒が大好きでしたが、大工の腕は誰にも負けず、頼まれたらイヤとは言わずに何でも引き受ける人情に厚い人でした。何よりすごいのは、仏さまを敬う信仰心です。毎日現在の東区元町にある本龍寺さまにお参りをする熱心な日蓮宗のご信者さんで「いつか自分でお寺を建てたい」と夢を見ていました。

当時、本龍寺さまで毎日一生懸命にお経を上げる寛義上人の姿勢に心打たれて大信者になった助右衛門さん。
その寛義上人も「いつかはお寺を建てたい」と願っていました。
本龍寺さまから独立してお寺建てることが許された寛義上人と助右衛門さん、念願叶ってお寺を建てることになります。
ですが現代のようにトラックや車はありませんので、建設用の木材は、定山渓から馬で運んだそうです。

ある日のこと、いつものように木材を運んでいると、突然の大雨に襲われました。
「お寺に使う材料だ！　何としても守るんだ！」
職人さんも馬も必死になって木材を運びます。
「もう少しだ！」
安全な場所まで最後の木材を運び終えると、木材を引っ張っていた馬が川に流されて亡くなってしまったのです。豊平までやっとの思いで到着した助右衛門さんと職人さんは、何があったのかを寛義上人にお話します。
「この寺のためにその馬は命をかけてくれたのか……『法華経のために命を捧げることは何よりも尊いことである』と日蓮大聖人はおっしゃいました。この寺で亡くなった馬の菩提を弔いましょう」と「馬頭観音さま」をお祀りすることを決めました。
本堂が完成した後の、明治19年4月24日に馬頭観音さまの石像と石碑を作り、現在の本堂の中に奉安しました。

当時の札幌は、主な交通手段を馬に頼っていましたので、馬屋さん、馬具屋さん、蹄鉄を付ける鍛冶屋さんといった馬に関係するお店が、お寺の周りにはたくさんありました。
働き者の馬もいつかは亡くなるときがきます。そうすると、経王寺まで来て、お世話になった馬たちへ、感謝のお経を捧げるようになりました。同時に、飼育している馬たちが健康で病気をしないようにお願いをする方が少しずつ増えてきました。

時代は変わり、昭和25年（1950）、第八世住職　松井義海上人は、市内の馬に関係する人たち約六百人と「札幌愛馬講」という名前の集まりを作り、お堂を新たに建てました。これが観音堂の始まりです。

昭和30年（1955）、日蓮宗の総本山　身延山久遠寺より深見日圓大僧正が経王寺にお見えになった際、観音堂でお題目を唱えると、馬の鳴き声が聞こえてきます。この不思議な出来事に深見大僧正は「お題目を唱える馬頭さんなのだから、これからは妙法馬頭観世音菩薩（みょうほうばとうかんぜおんぼさつ）という名前にしなさい」とおっしゃいまし

た。そして、本来の観音さまのお像も作り「妙法観世音菩薩（みょうほうかんぜおんぼさつ）」と名付けなさいとお名前をいただきました。これが現在、正面で優しく見守ってくださる観音さまなのです。

そして、当時本堂の中にあった「慈母観世音菩薩（じぼかんぜおんぼさつ）」も一緒にお祀りすることになりました。この観音さまは、この世に生まれることなく亡くなってしまった子や、幼くして亡くなってしまった子どもたちを文字の通り、お母さんのように優しく子どもたちを救ってくださる観音さまです。苦しくても、さみしくても、つらくても誰も助けてくれない。そんな子どもたちを暖かく守り、救ってくださいます。

観音さまは三十三種類に姿を変えて困っている人たちを助けてくれます。ぜひ観音さまに向かって「南無妙法蓮華経」とお題目を唱えてみてください。観音さまが姿を変えて、すぐ近くで助けてくれますよ。

慈福化皆
眼聚一令
海切入
視無衆佛
生量生道

慈しみの眼で私たちを見守ってくれる
その福徳の海はどこまでも果てしない
そしてすべての生きとし生けるものが
仏の道に入ることを願う

北海身延　妙法華山　経王寺
第十二世　正嫡傳灯　教壽院　日皇

経王寺　第十二世　山主　松井義宣